

# J. S. バッハ 『オルガン小曲集』

## ～構成とその目的～

椎名 雄一郎\*

### 1. はじめに

ヨハン・セバスティアン・バッハ Johann Sebastian Bach (1685～1750) はドイツ・バロック時代を代表する作曲家として知られているが、当時は作曲家としてよりもオルガニストとしてその実力が評価されていた。彼は約250曲のオルガン作品を残している。バッハは青年時代から晩年までオルガン作品を作曲し、彼のオルガン曲を年代順に並べると、10代の若きバッハが何に興味を持って勉強したか、当時の2大音楽様式であるイタリア、フランスの音楽をどのように研究したか、そして晩年のバッハはどのような音楽様式を重視したか、理解することができる。バッハのオルガン作品を演奏することにより、バッハの人生を追体験することができるのである。

バッハのオルガン作品は3つに分類できる。実用的な音楽（ムジカ・プラクティカ Musica Practica）、詩的な音楽（ムジカ・ポエティカ Musica Poetica）、そして理論的な音楽（ムジカ・テオレティカ Musica Theoretica）である。

---

\* 活水女子大学音楽学部准教授、金城学院大学キリスト教文化研究所設立20周年記念演奏会「椎名雄一郎 オルガンレクチャーコンサート」(2015年11月18日) 招待講師。

初期の作品はムジカ・プラクティカに分類される。つまり実用的な音楽で用途が定まっているものである。アルンシュタットのオルガニストを務めた時代（初期・アルンシュタット時代と呼ぶ）に残された作品がそれである。礼拝のコラール伴奏のために作曲された〈いと高き神にのみ栄光あれ〉BWV715, 〈甘い喜びのうちで〉BWV729などがある。

ヴァイマル・宮廷オルガニストとして務めた時期（中期・ヴァイマル時代と呼ぶ）に作曲された作品はムジカ・ポエティカに分類される。当時ルター派の音楽では、音楽と言葉は密接な関係があり、言葉を音、音型で表すことをバッハは目指した。例えば苦しみは半音階で、復活は上行音型で、また十字架を十字架音型などで、様々な音型を駆使して、コラールの歌詞、言葉を音楽で表現している。この時期の作品は『オルガン小曲集』、『ライプツィヒ・コラール集』などで、いずれもよく演奏される作品である。

1723年バッハはライプツィヒ・トーマス教会カントールに就任する。この職務にはオルガン演奏は含まれていなかったが、彼は各地のオルガンコンサートに招かれ、演奏した。その際の作品が現在まで伝えられている。また一方で、バッハはこれまでの作品の集大成として『クラヴィーア練習曲集』全4巻を出版するなど、自費で出版することにも精力を注いだ。これらの作品は理論的で、一度聴いただけではわからない数々の象徴、構成が考えられて作曲されている。この時代の音楽を「ムジカ・テオレティカ」と呼んでいる。オルガン作品では、『クラヴィーア練習曲集第3巻』、カノン風変奏曲〈高き天よりわれは来たり〉BWV769などである。

バッハはオルガニストとして活躍するほか、教育者としても、高い評価を得ていた。バッハの長男ヴィルヘルム・フリーデマン・バッハ Wilhelm Friedemann Bach (1710～84)、次男カール・フィリップ・エマヌエル・バッハ Carl Philipp Emanuel Bach (1714～88) の他、ヨハン・フィリップ・キルンベルガー Johann Philipp Kirnberger (1721～83)、ヨハン・クリスティアン・キッテル Johann Christian Kittel (1732～1809)、ヨハン・ルートヴィ

ヒ・クレプス Johann Ludwig Krebs (1713～80) など80人以上の弟子を育てたといわれている。バッハが弟子の教育のために作曲したと思われる作品が残っている。オルガンの分野では『6つのソナタ』BWV525～530、『オルガン小曲集』BWV599～644である。バッハの伝記作者ヨハン・ニコラウス・フォルケル Johann Nikolaus Forkel (1749～1818) によれば、『6つのソナタ』はバッハの長男ヴィルヘルム・フリーデマンの教育のために作曲されたとしている。バッハによる自筆譜の他、ヴィルヘルム・フリーデマンとバッハの妻アンナ・マグダレーナによって筆写された楽譜が残されている。

『オルガン小曲集』は、出版されなかったが、タイトルページにバッハ自身により、教育のためにこの曲集を作曲したと書かれている。バッハの意図は明らかである。現在でも『オルガン小曲集』はオルガン学習者が必ず練習する必須の曲集である。しかしこれまで演奏法について言及している研究はあるが、日本では『オルガン小曲集』の構成について、考察はほとんどされていない。本論ではバッハが『オルガン小曲集』の構成と、どのような意図をもって編集したか、これまでの研究を紹介しつつ明らかにする。

## 2. 『オルガン小曲集』の自筆譜とコラール

『オルガン小曲集』Orgel-Büchleinはバッハ自身による自筆譜が、ベルリン国立図書館のプロイセン文化財団にms. Bach P 283として所蔵されている<sup>1</sup>。この自筆譜は1冊の楽譜帳で、大きさは15.5cm×19cmと小型で182ページからなる楽譜帳である。182ページに164のコラール名が書かれている。すべてコラール名と共に五線譜が書かれているが、実際に作曲されたコ

<sup>1</sup> DOCUMENTA MUSICOLOGICA, Zweite Reihe,.: Handschriften-Faksimiles XI, *Johann Sebastian Bach, Orgelbüchlein*, (VEB Deutscher Verlag für Musik, Leipzig, 1984).

ルールは45曲である。ほとんどのページはコラール名と五線譜のみのページとなっている。バッハはケーテン時代にタイトルページを書き加えた<sup>2</sup>。そのタイトルページは以下のように記されている。

ここには初歩のオルガニストが、コラールを様々な仕方で展開するための手引き、さらにペダル演奏を習得するための手引きがある。この中に収められたコラールでは、ペダルが純オブリガート風に扱われているからである。いと高き神にのみ栄光あれ。隣人が当曲集より学べるように。

アンハルト＝ケーテン領主陛下の現宮廷楽長 ヨハン・セバスティアン・バッハ作曲。

バッハはまず164のコラール名を、ほとんどの場合1ページに一曲ずつ（一部は2ページで一曲）記し、2種類のラストルール（楽譜用の5線ペン）を使用し、1ページに2段の五線譜を3または4列引いている。現代の『オルガン小曲集』出版楽譜ではウィーン原典版<sup>3</sup>を除き、3段譜（手鍵盤2段と足鍵盤1段）で書かれている。しかしバッハの自筆譜では、すべてのページが2段譜としている（ウィーン原典版のみ2段譜であることを尊重して編集されている）。

バッハは164のコラールをどのように選択し、また実際に作曲された45曲のコラールはどのように選ばれたのだろうか。164のコラールは2つに大きく分類することができる。冒頭から48のコラールはアドヴェントからペンテコステをテーマとする教会暦によるものである。後半の115のコラールは一般的に教会で歌われるコラール、ルター派のカテキズム、そしてキ

<sup>2</sup> G.B.スタウファーは1722または23年としている。Johann Sebastian Bach, *The Complete Organ Works* (Colfax, Wayne Leupold Editions, 2012), p. xix.

<sup>3</sup> Johann Sebastian Bach, *Orgelbüchlein* ed. by Leisinger/Kooiman (Wiener Urtext Edition, Wien, 2004).

リスト者の生活をテーマとしたコラールを取り上げている。

164のコラールは、当時のどのようなコラール集（賛美歌集）からコラールを選んだのだろうか。『オルガン小曲集』が書き始められたヴァイマル時代、バッハがオルガニストを務めていたヴァイマル宮廷では『ヴァイマル讚美歌選集』*Auserlesenes Weimarisches Gesangbuch*（1681年、第2版1713年）、『罪人の神への賛美または聖なる歌集』*Schuldiges Lob Gottes oder Geistreiches Gesang-Buch*（1713）の他、当時のコラール集が使用されていた<sup>4</sup>。しかし、これらのコラール集とバッハが選択した164のコラールで合致するものはない。バッハのコラール選択は、宗教改革時の16世紀のコラールが約70%を占めており、バッハと同時代に作曲されたコラールは含まれていない。新バッハ全集で『オルガン小曲集』の校訂を担当したハインツ＝ハラルド・レーライン Heinz-Harald Löhlein は、1675年頃出版され、バッハ家で1冊は少なくとも所有していたが、現在は失われたコラール集ではないかと推測している<sup>5</sup>。なぜなら、ヨハン・クリストフ・バッハ Johann Christoph Bach（1642～1703）の『44のコラールによる前奏曲』<sup>6</sup>と『オルガン小曲集』では、選択されたコラールに共通点が多いためである。ヨハン・クリストフとヨハン・セバスティアンは同じコラール集を使用して作曲したのではないかとの可能性を指摘している。2012年に出版されたバッハオルガン作品全集で、校訂者のジョージ・B・スタウファー George B. Stauffer は前述の他、バッハの記憶を元にコラールを選択した可能性について言及している<sup>7</sup>。スタウファーは当時のコラール集がほとんどの場

<sup>4</sup> Robin A. Leaver, “Bach and Hymnody: The Evidence of the Orgelbüchlein”, *Early Music* 13 (1985), pp.227-236.

<sup>5</sup> Johann Sebastian Bach, *Neue Ausgabe Sämtlicher Werke* (Bärenreiter, Leipzig und Kassel, 1984) IV/1 Kritischer Bericht p.103.

<sup>6</sup> Johann Christoph Bach, *44 Choräle zum Präambulieren* (Bärenreiter, Kassel, 1949).

<sup>7</sup> Idem, *The Complete Organ Works* (Colfax, Wayne Leupold Editions, 2012) Series I: Volume 1B, ed. By George B. Stauffer, p. xviii.

合、コラール・テキストのみでメロディーは掲載されていないことを理由に挙げている。いずれにせよバッハは中部ドイツのルター正統派の信仰の中で育ったことから、バッハとその周辺では宗教改革以来のコラールを好んで歌っていたことは想像できるのではないだろうか。つまりバッハ一族の音楽文化の中で育ったJ. S. バッハが、『オルガン小曲集』で取り上げたコラールは、彼の中で血となり肉となっていたメロディーであったと考えられるだろう。

### 3. オルガン小曲集の成立過程

『オルガン小曲集』はバッハにより1冊の楽譜帳にまとめられた自筆譜が存在するが、164のコラール名と五線譜を記した後、作品の多くはすでに作曲されたものをこの楽譜帳に書き写しているため、ほとんど訂正なく美しい浄書譜となっている。しかしいくつかの作品は、この楽譜帳で直接作曲しているため、訂正箇所がみられる（BWV622など）。

教会暦によるコラールは48曲中33曲が作曲されている。特にアドヴェント、クリスマスは15曲中14曲、新年とマリアの潔めの祝日のコラールは5曲すべて作曲されている。受難節のコラールは13曲中、完全に作曲されているのは始めの7曲で、それに続く6曲のコラールは、〈おお悲しみよ、おお心の苦しきよ〉BWV Anh. 200が断片で残されている以外は、作曲されていない。イースターとペンテコステは15曲中7曲となっている。教会暦後半になるほど、作曲されていないコラールが多くなっている。

後半の教会で歌われるコラール類については115曲中12曲とほとんどのコラールが作曲されていない。

どのような順番でこの楽譜帳に記入されていたのか、楽譜帳の紙、バッハの記譜法、筆跡により研究されている。各研究者が共通して言及していることは、バッハがヴァイマル宮廷オルガニストを務めている時代を

中心に書き込まれたということである<sup>8</sup>。ケーテン時代にタイトルページが書かれ、ライプツィヒ時代に〈神の恵みを共にたたえん〉 *Helft mir Gottes Güte preisen* BWV613, 〈おお悲しみよ, おお心の苦しきよ〉 *BWV Anh. 200* の断片を作曲したほか, 〈キリストはわれらに至福を与え〉 *Christus, der uns selig macht* BWV620aをBWV620に, 〈来たれ, 創り主にして聖霊なる神よ〉 *Komm, Gott Schöpfer, heiliger Geist* BWV631aをBWV631に改訂している。これらの改訂について, スタウファーは演奏と教授活動の結果として改訂だろうと述べている<sup>9</sup>。

ライプツィヒ時代に新たな作品を作曲, 改訂作業を行っていることは注目に値する。これまで『オルガン小曲集』で多くのコラルが実際に作曲されなかったことの大きな理由として, 各曲が1ページないし2ページの小規模なオルガン・コラルを作曲することよりも, より規模の大きいオルガン・コラルの作曲にバッハの興味が移ったからとしている<sup>10</sup>。しかしそうであれば, ケーテン時代にタイトルページを書き加えたり, さらにライプツィヒ時代に新たな作品の作曲また改訂作業をしたりしないのではないだろうか。2011年に出版された『ヨハン・セバスティアン・バッハオルガン作品全集』第7巻では, 『オルガン小曲集』が未完に終わった理由として, 個人的理由と作曲上の理由が挙げている<sup>11</sup>。ケーテンの宮廷楽長となったバッハには, もはやオルガン・コラルを作曲する必要がなかったという個人的な理由, そしてコラル作曲法上すべてのタイプの作曲技法を網羅してしまったという作曲技法上の理由である。

<sup>8</sup> 新バッハ全集校訂のレーラインは1713～1714, 1714～1715, 1715～1716, Cヴォルフは1708～1712, 1712～1713, 1715～1716, R.ステインソンは1708～1712, 1712～1716, 1716～1717。S.ヒームケは1713～1714, 1714～1715, 1715～1716, 1716～1717。

<sup>9</sup> Johann Sebastian Bach, *The Complete Organ Works Series I : Volume 1B* (Colfax, Wayne Leupold Editions, 2012) p. xix.

<sup>10</sup> Johann Sebastian Bach, *Sämtliche Orgelwerke Band 7*, ed. By Sven Hiemke (Breitkopf & Härtel, Wiesbaden, 2011) p. 7.

<sup>11</sup> *Ibid.*, p. 7.

『オルガン小曲集』の作曲期間が約30年にわたることは、この曲集の特殊さを物語っている。この間ヴァイマル時代、ケーテン時代、そしてライプツィヒ時代に、バッハがこの曲集を見直す機会があったとすると、必ずしも曲集を書き始めた時からライプツィヒ時代の晩年まで、同じ目的で書かれ続けたとも考えられない。次章で曲集の構成について考察する。

#### 4. 曲集の構成

『オルガン小曲集』の最大の疑問は、バッハは164のコラール名を各ページに書いた後、なぜ45のコラールのみ作曲したのか、また作曲されなかったコラールは、なぜコラール名と五線譜のみを残したのかである。当時、紙は貴重品であった。バッハは『オルガン小曲集』の中で、スペースが足りなくなった場合は下の余白にタブラチュア（文字譜）で小さく、残りの小節を書いていることもある。このように節約家だったバッハは、他の自筆譜でも余ったページには別の作品を書くなどしている。しかし、『オルガン小曲集』の場合には、作曲されなかったコラールはそのままの状態で見事に現在に伝えられている。この理由を明らかにするため、この章では、曲集の構成を分析する。

前述のように45のコラールが作曲されているが、実際には〈最愛なるイエスよ、われらここにあり〉Liebster Jesu, wir sind hier のコラールは2つの版が記されている。BWV633と634で、BWV634が初期稿、BWV633が最終稿である。また〈おお悲しみよ、おお心の苦しきよ〉O Traurigkeit, o Herzeleid BWV Anh. 200は冒頭2小節のみの断片が作曲されている。全体としては完全に作曲された作品は46曲だが、BWV634はBWV633の初期稿なので、実質45曲である。

全45曲の内訳をまとめたものが表1である。教会暦によるコラールが33曲、それ以外の教会で歌われるコラールなどが12曲となっている。教会暦



**表1 オルガン小曲集の構成**

14コラール アドヴェント・クリスマス…BACH	}	33コラール (イエスの生涯)	}	45コラール
3コラール 新年				
2コラール マリアの潔めの祝日				
7コラール 受難節…十字架上の7つの言葉				
7コラール イースター・ペンテコステ				
12コラール 教会歌、カテキズム、キリスト者の生活…12使徒…教会を象徴				

のコラールは、アドヴェントとクリスマスが14曲、新年が3曲、マリアの潔めの祝日が2曲、受難節が7、イースターとペンテコステが14曲となっている。つまりアドヴェントとクリスマス、受難節からペンテコステまでが各14曲、その間に5つのコラールが挟まれている。

バッハは、言葉を音楽で表すために音型のほか、数の象徴を曲集の構成、そして各作品の作曲において取り入れている。14という数字はバッハを表す数字といわれている（数字の象徴例は表2）。つまり教会暦の部分は冒頭と終わりに14のコラールが対称的に並べられている。教会暦はイエス・キリストの地上での歩みを表している。バッハのイエスに依り頼んで歩もうとする彼の信仰が、14というBACHの数字に象徴されているようである。14の数字に挟まれて、真ん中に5つの新年とマリアの潔めの祝日のコラールが配置されている。5つのコラールの真ん中、つまり3曲目に位置し、教会暦部分の真ん中（中心）となるのが、17曲目の〈汝にこそ喜びあり〉In dir ist Freude BWV615である。この作品は『オルガン小曲集』の曲集の中でも、特殊な作品である。唯一コラール旋律が冒頭から出てこない、『オルガン小曲集』では例外的な作品である。このコラール作品が教会暦上の真ん中であることは偶然とは言えないのではないだろうか。

後半の12曲は教会で歌われるコラール、カテキズム、キリスト者の生活をテーマとしている。12とは表2のとおり12弟子を表している。12弟子は教会の始まりであるため、教会で歌われるコラール等は12曲という教会を

表2 数字の象徴例

数字	事項	説明
3	三位一体	父なる神, 子なるイエス・キリスト, 聖霊の一致
4	天使 元素 気質	四大天使 (ミカエル, ガブリエル, ラファエル, ウリエル) 四元素 (土, 空気, 水, 火) 四気質 (胆汁質, 多血質, 粘液質, 憂鬱質)
5	人間	人間は5本の指, 五感をもっていることから
6	天地創造	神は天地創造を6日間かけて行われた
7	受難	十字架上の7つの言葉 (イエスは十字架上で7つの言葉を)
12	1年、使徒、教会	1年は12ヶ月, イエスの12人の弟子が教会のはじまり
14	バッハ	BACH (B=2, A=1, C=3, H=8) =14
33	イエスの地上での歩み	イエスの生きたとされる年齢
37	JCHR	イエス・キリストのイニシャル JCHR (J=9, C=3, H=8, R=17) =37
45	IHVH	父なる神の名前 (ヤハヴェの神) IHVH (I=9, H=8, V=20, H=8) =45
48	INRI	Jesus Nazarenus Rex Indaeorum ユダヤ人の王, ナザレのイエスの意味) の頭文字。 INRI (I=9, N=13, R=17, I=9) =48

象徴する数字の数で作曲しているようである。

さて、全体の45曲は IHVH (I=9, H=8, V=20, H=8) =45の数字にあたる。IHVHとは父なる神の名前であり、教会暦 (イエスの人生) と教会の働きはすべて、父なる神の中にあるということ象徴しているようである (なおラテン語ではIとJ, UとVは区別されなかったため、同じ文字として扱われる)。

数字の象徴を考察する上で、気を付けなければならないことは、どこまでがバッハ自身が考えたのかということである。その当時、確かに数字による象徴は広く用いられていた。バッハ自身は書き残していないが、アンドレアス・ヴェルクマイスター Andreas Werckmeister (1645～1706) なども、数字の象徴について言及している。しかし現代の研究者が計算しているうちに、意図する数字となったという場合もあるのではないだろうか。バッ

ハが数字のこだわりを持っていたことは、バッハ自身により小節数が楽譜に書き込まれていることで明らかである。例えば『平均律クラヴィーア曲集』第1巻のハ長調フーガ末尾に「27」の数字、嬰ハ短調の前奏曲の末尾に「39」の数字がかかっている。演奏また教育のためには小節数を楽譜に書き込む必然性はない。小節数をメモした理由は、小節数を数えながら作曲し、象徴を小節数に組み入れようとする行為に他ならない。『オルガン小曲集』の場合は、各曲の成立年代が広範囲に及ぶため、前述のようにコーラルの数をもって象徴したかどうか、疑問は残る。次章で『オルガン小曲集』がどのような目的で、作曲されたのか、そしてバッハは果たして上述した象徴を、考慮して曲集を編集したのかについて論じる。

## 5. 『オルガン小曲集』の目的

ケーテン時代に書かれたタイトルページには、教育目的としてこの曲集を作曲したことを明確に宣言している。しかし、オルガン小曲集の記入を開始した当初から教育目的であったのかは疑問である。なぜなら弟子たちによる各作品の筆写譜は、そのほとんどが18世紀後半に筆写されているからである<sup>12</sup>。1710年代に残されている筆写譜は、1714年から17年にコピーされた弟子ヨハン・トビアス・クレプス Johann Tobias Krebs (1690～1762) による29曲など少数である。ヴァイマール宮廷でバッハはヴィルヘルム・エルンストに仕えたが、ヴィルヘルム・エルンストは自身が礼拝説教を担当するなど、神学にも通暁しており<sup>13</sup>、バッハ自身もオルガン奏楽に精力を傾けていたのではないかと考えられる。そこで礼拝の前奏、後奏

<sup>12</sup> Johann Sebastian Bach, *Neue Ausgabe Sämtlicher Werke, IV/1*, Kritischer Bericht (Leipzig und Kassel, Bärenreiter, 1984) pp.17-19.

<sup>13</sup> 川端純四郎『J.S.バッハ時代を超えたカントール』（日本キリスト教団出版局 2006）p. 101.

等で演奏できる作品を作曲し、自分自身のコレクションとしてこの曲集を作曲した可能性が考えられる。

バッハはヴァイマル時代、イタリアやフランスの音楽を筆写し研究していた。オルガン作品ではイタリアのジローラモ・フレスコバルディ Girolamo Frescobaldi (1583～1643) の『音楽の花束』*Fiori musicali*、フランスのニコラ・ド・グリニー Nicolas de Grigny (1672～1703) の『オルガン曲集』*Livre d'orgue* をコピーしているが、これらの曲集はミサで演奏される作品が集められて1つの曲集となっている。これらの曲集の存在にバッハはアイデアを得て、礼拝で使用する曲集として『オルガン小曲集』を作成し始めたのであろう。

ケーテン時代になると、バッハは、『ヴィルヘルム・フリーデマン・バッハのためのクラヴィーア小曲集』*Clavierbüchlein für Wilhelm Friedemann Bach* (1720年記入開始)、『アンナ・マグダレーナ・バッハの音楽小曲集』*Notenbüchlein für Anna Magdalena* (1722年記入開始)、『平均律クラヴィーア曲集第1巻』*Das Wohltemperirte Clavier* (1722年完成)、『インヴェンションとシンフォニア』*Inventionen und Sinfonien* (1723年浄書) の各曲集を作成しているが、いずれの作品も教育目的に作曲したことが明らかである。バッハの長男ヴィルヘルム・フリーデマンが1710年生まれ、次男カール・フィリップ・エマヌエルが1714年に生まれたことを考えると、1720年代に息子の教育を考え、教育作品の作曲に興味を持っていたことは理解することができる。当初、自分自身のコレクションとしていた『オルガン小曲集』も同様の目的を持たせ、曲集の趣旨の変更を行ったのではないだろうか。また、S.ヒームケによれば、「小曲集」と名付けていることもこの時代の特徴だとしている。ヴィルヘルム・フリーデマン、アンナ・マグダレーナの各曲集も「小曲集」*Büchlein* という言葉を使用しており「オルガン小曲

集』のタイトルがこの時代に書かれたことが理解できる<sup>14</sup>。

さて、ライブツィヒ時代、前章で述べた通り〈神の恵みを共にたたえん〉BWV613, 〈おお悲しみよ, おお心の苦しみよ〉BWV Anh. 200の断片を加え, 〈キリストはわれらに至福を与え〉BWV620, 〈来たれ, 創り主にして聖霊なる神よ〉BWV631を改訂している。一連の作業は教育用の曲集としてより充実を図ったと考えられる。〈おお悲しみよ, おお心の苦しみよ〉BWV Anh. 200の断片については, 意見の分かれるところである。2小節作曲したところで作曲を断念したという説, または冒頭2小節をバッハが作曲し, その後を弟子たちに作曲させるための課題だったとも考えられている<sup>15</sup>。

なぜライブツィヒ時代に再び『オルガン小曲集』に手を入れたのか, 他の作曲されていないコラルの紙はそのままにされたのか, もう一度検討したい。第4章で述べた通り, 作曲された45曲のコラルは, 教会暦による部分33曲と教会で歌われるコラル等の部分12曲に分類され, それぞれの数字には象徴的な意味を見出すことができる。ライブツィヒ時代の代表的な鍵盤楽器作品は4巻からなる『クラヴィーア練習曲集』*Clavier Übung*である。この曲集は, バッハの鍵盤音楽の集大成ともいうことのできる曲集で, 特に第3巻(1739年出版)はオルガンのための作品集である。第3巻は「ムジカ・テオレティカ」の典型で, 曲集全体の構成と各曲には音型, 数字を用いた象徴が多用されている。バッハ晩年の作品集に共通することは演奏すること以上に, 作曲技法と様々な象徴が使用されており, バッハ自身の芸術を後世に残そうとする姿勢がみてとれる。

『オルガン小曲集』も同様の考え方に基づいて整備し直したのではないだろうか。バッハはライブツィヒ時代の1730年から40年代に『オルガン小

<sup>14</sup> Johann Sebastian Bach, *Sämtliche Orgelwerke Band7*, (Breitkopf & Härtel, Wiesbaden, 2011), p. 11.

<sup>15</sup> Johann Sebastian Bach, *The Complete Organ Works Series I: Volume1B* (Colfax, Wayne Leupold Editions, 2012) p. xxvi.

曲集』の改訂作業を行っている。この時期はちょうど、『クラヴィーア練習曲集』の出版時期と重なるのである。『オルガン小曲集』の楽譜帳に他の作品を書き入れてしまうと、曲集全体の構成が不明瞭になってしまうため、コラール名と五線譜を書いた状態のみで、残されたのではないだろうか。断片として残っている〈おお悲しみよ、おお心の苦しきよ〉BWV Anh. 200については、他の筆写譜など一切他の資料には見られない。そのため、この作品はライプツィヒ時代に直接この楽譜帳に作曲しようとしたが、構成上合わないことに気づき、2小節のみで作曲を取りやめた可能性が考えられる。

このように、約30年かけて完成した『オルガン小曲集』は、ヴァイマル時代には主にバッハ自身の礼拝奏楽のためのコレクションとして、ケーテン時代には息子や弟子たちのための教育用、そしてライプツィヒ時代の晩年にはバッハの音楽の集大成として、編集されていると考えられる。他の曲集で約30年にわたって作曲された曲集はない。弟子たちの教育のために書かれたことは確かで、いくつかの筆写譜が残されている。しかしバッハの生前に45曲全曲を筆写しているものは1つもない。ほとんどのものは数曲のみ筆写されている。このことは、教育上の目的として45曲は必要ないとバッハも弟子も考えていたのではないだろうか。それにも関わらずライプツィヒ時代に作品が追加されていることは、曲集全体の構成が理由であることは明らかである。

## 6. おわりに

本論は『オルガン小曲集』の構成と成立過程を観察することにより、バッハがどのような意図で曲集を編集したのかを考察した。これまで多くの研究者が様々な説を唱えてきた。しかしそのいずれもが、小曲より大曲の方が価値が高い、またバッハの後期の作品の方が、中期の作品よりも価値が

高いという価値観から、『オルガン小曲集』を研究してきたと思えてならない。しかし、バッハは小曲の集まりであるこの作品集にライプツィヒ時代の晩年に至っても曲を追加し、一度作曲した作品も改訂していることから、バッハは大曲、小曲という区分で作品を考えていなかったことは明らかである。『オルガン小曲集』の目的は、それぞれのヴァイマル時代、ケーテン時代、ライプツィヒ時代により、変化していくと共に、常にバッハがこの曲集を重要視していたことが、各時代の編集作業を行ったことから明らかである。

『オルガン小曲集』はオルガンを学ぶ際に、必ず全曲練習する曲集である。いわばオルガン演奏の基本である。そのためバッハのオルガン作品の初歩として練習され、手と足を合わせる難しさに集中してしまい、バッハがこの作品集に盛り込んだ象徴、作曲技法などについて、研究する機会がオルガニストにはほとんどない。バッハは『オルガン小曲集』の作曲を途中で、やめたのではなく晩年に至るまでその作品に対して改訂作業を行った。本論を通して『オルガン小曲集』の価値を再評価されれば幸いである。

